連　載：群馬パース大学のあゆみ［第３回］

看護学科の過去・現在・未来

矢 島 正 榮[1)]・牛込三和子[1)]

School of Nursing of Paz : Past, Present and Future

Masae YAJIMA[1)] and Miwako USHIGOME[1)]

キーワード：看護師養成、看護学教育

１．看護短期大学の開設

群馬パース大学保健科学部看護学科の前身である群馬パース看護短期大学は、1998年、群馬県高山村に開設された。少子高齢化の進行が既に我が国の抱える難題として大きく取り上げられていた当時、群馬県の北毛地域に「看護師養成の拠点となる高等教育機関」を、という関係諸氏の意思の実現であった。高山村役場の一角を借り受けて短期大学設置準備室を設置し、同村からの多大な支援を受けながら準備が進められたことは、当時の担当者らにより感謝を込めて語られている。

開学当初の入学定員は80名、群馬県内は元より、全国各地から入学生を受け入れた。開設の呼びかけに応じて集まった教員は、創設者の熱意に共鳴した県内外の看護師教育の熟達者であった。看護専門学校、短期大学で長年看護教育に携わってきた経験知が惜しみなく投入され、質の高い教育が行われていたと自負する。

短期大学が完成年度を迎えると同時に、１年課程、入学定員25名の地域看護学専攻科が開設された。さらに、翌年には理学療法学科が開設され、学校名は群馬パース学園短期大学に変更され、組織は確実に発展を続けていった。理学療法士を目指す学生と机を並べることは、看護学科の学生にとって、医療職としての視野を一回り広げるよい契機となった。

表１　群馬パース学園短期大学（旧　群馬パース看護短期大学）、群馬パース大学保健科学部看護学科の沿革

	短期大学	大学・大学院
1998年	群馬パース看護短期大学開学　看護学科開設（入学定員80名）	
2001年	地域看護学専攻科開設	
2002年	理学療法学科開設 群馬パース学園短期大学に名称変更	
2005年	募集停止（群馬パース大学へ移行）	群馬パース大学開学 群馬パース大学保健科学部看護学科開設（入学定員70人）
2008年	廃止	
2009年		群馬パース大学大学院開学 保健師助産師看護師養成所指定規則改正に伴うカリキュラム改訂
2010年		高山キャンパスから高崎キャンパスへ全面移転
2012年		看護学科保健師課程選択制導入・カリキュラム改訂
2013年		保健科学部検査技術学科開設 看護学科助産師課程開設・カリキュラム改訂・入学定員を80名に増加

１）群馬パース大学保健科学部看護学科

表２　看護学科教員組織（2015年４月現在）

	教養	基礎看護学	成人看護学	老年看護学	母性看護学・助産学	小児看護学	精神看護学	在学看護学	公衆衛生看護学
教　　授	1	1	2	2	1	—	—	—	2
准 教 授	—	2	1	—	1	—	—	1	1
講　　師	1	1	1	1	1	1	1	—	1
助　　教	—	—	1	1	—	1	—	—	—
助　　手	—	—	2	—	—	—	—	1	—

看護学科は、教員組織の再編・充実、実習施設の安定的な確保、学生の国家試験受験支援と様々な課題に直面しながらも、次第に県内での認知度と信用を高め、地道に足場を固めていった。また、この間に、高山村との緊密な関係が築かれた。乳児の家庭訪問実習、老人クラブや婦人会での健康教育実習、地元のスポーツクラブへの参加と、村の至る所で学生が暖かく受け入れていただき、村民の皆様の中に溶け込んで学習活動や課外活動が展開された。成長の著しい10代の終わりから20代初めの貴重な時間を、高山村の自然と素朴な人々に囲まれて過ごしたことは、当時の学生にとってかけがえのない体験となった（表１）。

２．短期大学から大学へ

群馬パース大学が開学した2005年当時、看護教育の４年制大学化の動きは国公立大学では終盤を迎え、引き続き私立大学の看護系学部・学科の開設ラッシュが始まろうとしていた。そのため、群馬パース学園短期大学の４年制大学への移行は、今、振り返れば必然であったようにも見える。しかし、当時、本学は周囲に一歩先駆けて短期大学から大学への移行に踏み切った。その実現は、当時の理事長の「より質の高い教育」へという志向に賛同し、その牽引力に引き上げられた職員諸氏の努力によるところが大きかったといえる。教員もこれに応じ、大学人としての信任を得るべく研究活動に一層の力を注いだ。

３．大学の基盤確立から現在

１）教員組織の確立

大学への移行と前後して、看護学科は他大学や研究機関での豊富な教育・研究経験を持つ数名の教授を新たに迎え、教育と研究の両輪を回すための準備が整った。教員組織は安定し、専門領域毎に職位の階層ができ、職務を通しての人材育成がなされるようになっていった。その中で、本学看護学科で教育者・研究者として育ち、その能力を新しい天地で発揮すべく巣立っていく教員も生まれた（表２）。

２）研究活動の発展

新しい教育・研究指導体制のもとで若手教員の研究能力が向上し、科学研究費助成事業の申請率、採択率も急速に伸び、私立大学としては誇れる実績を上げるようになり、現在に至っている。研究分野は、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、公衆衛生看護学、在宅看護学、看護管理学と各分野に渡り、教員はそれぞれが専門とする学術団体等に所属し、活発に活動している（表３）。

表３　看護学科教員の科学研究費補助金申請・採択状況（H22から現在）

年度	申請数	新規採択数*	採択率
H22年度	12	3	0.25
H23年度	9	4	0.44
H24年度	12	2	0.17
H25年度	11	2	0.18
H26年度	13	3	0.23
H27年度	14	3	0.21

＊当該年度に移動した者を含む

３）入学試験制度の変遷

大学開設から５年を経た2010年、高山キャンパスから高崎キャンパスへの全面移転を機に、入学希望者は大きく増加した。入学試験制度は、受験生の多様なニーズに応え、多彩な人材を幅広く集めるために、ＡＯ入試、センター試験利用入試と、新たな方式を順次加え、また、試験科目に変更を加えて整備・充実を図ってきた。そのプロセスにおいては、将来、責任ある看護専門職として社会に貢献し得る優秀な人材を募るという目的に加え、群馬県の高山村と高崎市に拠点を置く、私立の医療系単学部からなる本大学が、地域社会からどのような人材養成を期待されているかを常に探求

表４　入試区分別の募集定員推移

入試区分	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
Ａ　Ｏ　入　試	―	―	―	―	8	10	5	5	5	5	5
推　薦　入　試（指　定　・　校　長）	35	35	35	35	25	25	25	25	25	25	25
特　別　入　試（地域・社会人・帰国子女）	5	10	10	10	12	10	5	5	5	5	5
一　般　入　試	30	25	25	25	25	20	30	30	35	35	35
センター試験利用入試	―	―	―	―	―	5	5	5	10	10	10
合　計	70	70	70	70	70	70	70	70	80	80	80

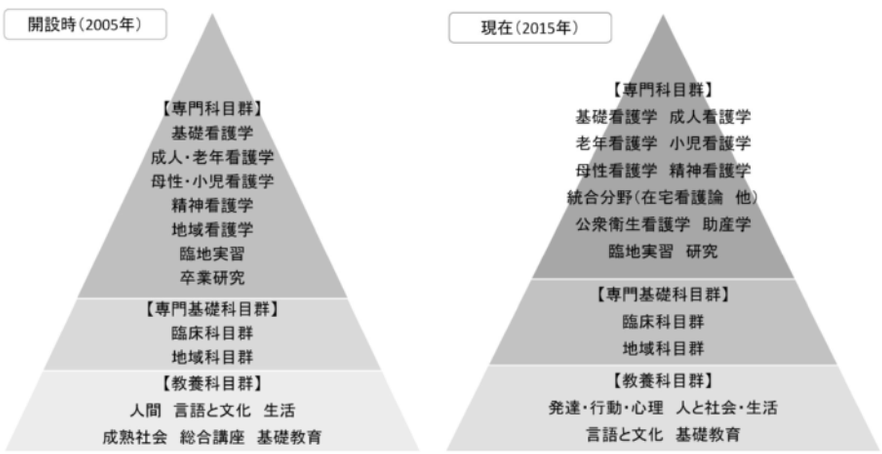

図１　大学開学時および現在の看護学科教育課程の概念図（大学案内から）

し、応えるための変革を重ねてきた。しかし、一方で変わらず貫かれている理念もある。看護を志す者の基盤として看護学科が掲げてきた「人が好きで、人を思いやり、人を援助することに労力を惜しまない人」、「相手の立場に立ってものごとを考えることのできる人」、「看護学に興味をもち、学ぶ意欲にあふれ、主体的に学習する姿勢のある人」という学科教員全員が望む新入生像は、アドミッション・ポリシーとして明文化される以前から現在まで変わらない（表４）。

４）教育課程の変遷

看護学科の教育課程は、2005年の開学以降、2008年（2009年度入学生から適用）、2011年（2012年度入学生から適用）と２度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正を受けて改訂を加えてきた。また、その間に2012年度には保健師課程の選択制導入、2013年度には助産師課程開設が行われ、都合３回の教育課程改訂を重ねてきた。そして、現在、看護学科は看護の３職種全てに渡る幅広い教育内容を備える学科となった。現在の教育課程は、大学開学当初に構築された教養科目群、専門基礎科目群、専門科目群と積み上げていく概念を踏襲しつつ、教養科目群においては看護の対象である人とその営みを個人と社会の両側面から理解することをより重視し、専門科目群においては専門領域を独立させてそれぞれの特質を明確にするとともに、統合分野でその統合を図る形に改変してきている（図１）。

５）卒業生の動向

2015年４月現在、看護学科の卒業生は495人に上る。例年、卒業生の就職率は100％を堅持しており、群馬県内外の病院、市町村保健センター、事業所の保健管理部門等、様々な看護の場で活躍している。また、初期の卒業生には、既に各々の職場を牽引する立場にある者も出てきており、実務で突き当たる様々な壁をいかにして乗り越えるかに悩み、母校を訪ねてくることも多い。彼らからは、卒後教育等について母校からの一層の支援を求める声が聞かれている。

また、結婚、出産等のライフ・イベントに伴い、或いは、新たな能力開発、自己実現の場を求めて、転職、再就職の相談も寄せられている。本学と同系列にある株式会社サフランで平成22年に開始された転職・再就職支援事業は、県内医療機関とのネットワークを広げ、実績を積み重ねており、この事業との連携により、こ

表５　入学者数と卒業生数

年度	入学者数	卒業者数	卒業者累積
2005年度	77	—	—
2006年度	74	—	—
2007年度	75	—	—
2008年度	59＋(1)＊	68	68
2009年度	91	69	137
2010年度	87	69	206
2011年度	88	55	261
2012年度	85	75	336
2013年度	86	80	416
2014年度	86	79	495

＊編入生

れからの卒業生の就労継続に関するニーズ把握、支援の充実が期待される（表５）。

表６　看護学科教員による公開講座（開講年度、講座名）

開講年度	講　　座　　名
H17年度	三世代が共に生きる ～生きることが生きがい～
H18年度	すぐに役立つ福祉サービスの知識
	介護のこころ（家族介護）
H20年度	認知症高齢者の看護
H23年度	こころの健康を守れ！ ～鍵はセルフケアにあり～
H25年度	自分のカラダは自分で守る ～健康で明るい未来のために～
	こころの健康を守れ！ ～鍵はセルフケアにあり～
H26年度	こころの健康を守れ！ ～鍵はセルフケアにあり～
	認知症の人と出会った時にできること
	日常生活の化学物質と健康

６）大学組織の拡大の中での看護学科

群馬パース大学は2009年に大学院を開学し、2013年に検査技術学科を開設した。大学院保健科学研究科の現在の教育課程は、医療職の共通基盤となる科目、及び看護学、理学療法学、病因・病態検査学の各専門分野における最新の専門知識と技術を教授する科目と特別研究で構成されている。大学院の開学により、看護学科の卒業生が看護学の先端を学び直し、専門分野の探求を深めていくための受け皿が整った。検査技術学科の開設にあたっては、専門の教員に看護学科での講義も引き受けていただいており、関連科目の教育内容の充実に繋がっている。

地域に向けての活動は、群馬パース大学附属研究所、地域連携推進室の事業に参画し、公開講座、研究発表会、地域の課題解決の取り組みへの協力などを積み重ねてきた。また、学科内の専門領域単位でも研究や学生の教育活動をとおして、実習施設をはじめとする地域の医療機関、自治体や住民組織との協力関係を築いている（表６）。

４．今後の展望

現代の我が国は成熟社会、知識基盤社会、グローバル社会といわれ、科学技術の発展により世界中からの大量の情報が瞬時に行き交い、人の手を介さない生産、流通、サービスが今後益々増加していくと考えられる。しかし、保健医療福祉の分野においては、人と人が直接関わり合い、支え合う、温かな思いやりに満ちた関係を大切にしていく必要がある。看護学科は将来に渡って社会の変化、医療技術の進歩に対応していける能力とともに、人間としての豊かさを備える調和した人材を輩出しつづけることを目指していく。

流動する社会の中で看護を支える人材を育て、本学の役割を果たしていくために、入学制度、教育課程、卒業生の検証を緻密に行い、今後も引き続き改革を重ねていく必要があると考える。看護学科の課題を分析、共有し、共に保健科学部を構成する理学療法学科、検査技術学科とも手を携えて大学の教育理念を実現し、それぞれの教育目標を達成していきたい。また、地域に根差した大学として、看護学科が保有する専門知識、技術、研究により得られた新たな知見を積極的に提供し、地域社会のニーズにも応えていきたい。

看護学科の教育は、実習施設を始め、地域の様々な機関で看護活動を展開する看護職に支えられて成り立っている。教員が現地へ赴き、現場の看護職と交流し、看護の課題を共有する場面も多い。そこで、看護学科は、卒業生を始め、群馬県内及び近県で活動する看護職が看護の質を高め、一人一人が生き生きと看護を展開するために更なる貢献をしていきたいと考える。彼らが、現場の活動の中で抱える様々な課題を持ち寄り、共に考え、発展的な解決を目指していくための拠点となり、また、地域の看護職の現任教育の役割を担うべく、看護学科と大学院保健科学研究科看護学領域が連動し、公開セミナーや外部に開かれた学習会などの活動を今後も充実させていくとともに、新たな企画にも取り組んでいきたい。